

# 2024年 春。

ふじかわ だいすけ  
藤川 大輔

●自動車総連 副事務局長

明らかに潮目が変わろうとしている。自動車総連の総合生活改善の取り組み、いわゆる春闘は3月28日の集計時点で、賃金カーブ維持分と改善分を併せた総額が12,706円となった。現時点、3割程度の解決率であるが、それでもこの金額は1975年以降でもっとも高い金額だ。ちなみに昨年同時期が8,499円であったので、昨年よりその勢いを増している。現在の状況に一喜一憂するつもりはない。総括するには早計だ。しかし、一昨年までの賃上げ交渉結果とは隔世の感がある。

今年の自動車総連の総合生活改善の取り組みでは、取り組みの基本方針に「日本経済をけん引する」と記載した。これまでは、自動車総連の取り組みが結果的に日本経済に寄与できれば良いとの考え方であったが、今年は大きく一歩踏み出した格好だ。いささかおこがましい気持ちもなくはないが、それぐらいの気概を持って自動車総連加盟組合が会社と向き合い、真摯に交渉を尽くすことが必要だ。自動車産業では、人材の定着や人材不足が深刻化している。まして生産年齢人口は減少の一途だ。だからこそ、組合員には自動車産業で働いていることに誇りを感じてもらいたい。これから就職を考える人には「自動車産業で働きたい」と思ってもらえる魅力ある産業にしていかななくてはならない。この思いに労使の別はない。

長らく停滞してきた日本経済がようやく大きく動こうとしている。物価上昇と賃上げが持続する経済の好循環を実現させるには、この動き

を確実なものとしなくてはならない。瞬間的な出来事や一過性のものとならないよう労働組合の実力が問われている。

私の尊敬する先輩から、組合役員に必要なことは「虫の目、鳥の目、魚の目」を持つことだと教わった。虫の目は様々な視点で細かく見ていくということ。鳥の目は物事を俯瞰できる広い視野。そして魚の目とは、潮目を見るように時勢を見極めることのできる目ということだ。これらは一つも欠くことはできないが、今は、まさに魚の目だ。組合役員として間違いのない判断をしなくてはならない。

本稿を執筆している今日は4月1日である。自宅から自動車総連がある事務所までの間で、新入社員と思しき若者を多く見た。入社式に向かうのか。思わず彼らに、子どもの頃から憧れていた職業なの？どこに魅力を感じた会社なの？決め手は何？そんな問いをしたくなる。

自動車産業にもきっと多くの若者が入って来たであろう。彼らの胸に秘めた志を受け止められるだけの魅力を、自動車産業が持ち合わせているのか。やりがいや働きがいを感じられる職場になっているのか。彼らの期待を裏切らない職場でなければならない。キラキラした光を放つ彼らの傍らでそんなことを考えていた。そして、労働組合役員としてまだまだやるべきことがあると素直に思った。

新年度早々青臭いことを書いてしまった。今日は嘘が許される日か。でも嘘ではない。